大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No.29　50. 12

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　編集人・衛　藤　　久

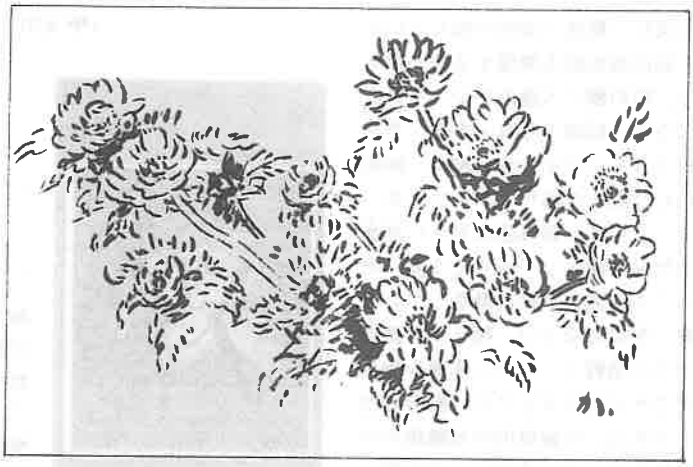
大衆芸術指導者へ二つの提言

―趣味としての芸術のために―

県教育長　山　本　峯　生

文化・芸術の大衆への浸透が、昨今急速に広まりつつあることはまことに結構なことである。芸術には指導者が必要であり、大衆芸術人口の増大に伴って、指導者層も大幅に増加してきた。大衆芸術の普及とその質の向上に、指導者層の果たすべき役割は極めて大きい。そこで私は、大衆芸術指導者に二つの提言を供したい。

提言の第１は商業イズムの持ち込みへの苦言である。大衆芸術の指導者にはそれを自己の生活の糧にしている人たちも少なくない。このこと自体はどうこう言うべき筋合ではなかろうが、あまりに営業的なやり方が過ぎると、大衆芸術は次第に特殊的なものとなりいびつなものになっていって、やがては健全な大衆性を喪失してしまう懸念も多分にあるからである。



花　　県芸振会議副会長　チャーチル会大分会長　河野　彰

第２の提言は指導上の心構えの問題である。一般的に大衆は文化については受動的な立場に立つ。芸術においても、大衆はそれを受容し享楽する側に立ちがちで、みずからが創り出したり演技したりする人口の比率はまだまだ低い。この時点で、大衆とプロとの相違点を明らかにしておく必要がありそうだが、大衆とプロとは、芸術に対する姿勢が根本的に異質だと思うのである。プロとは芸術を売るものであり、大衆は芸術を楽しむものである。売りものではその価値のみが問題であるが、楽しみはその人の心の問題である。もちろん芸術する以上、その芸術価値は高いほどが望ましいし、斯界の評価も高いに越したことはない。また、芸境が深まるほど芸への楽しみが大きくもなる。だがしかし、大衆芸術にはもう一つの、自分のための自分の楽しみという最大の目的が存在し、この楽しみは心の在り方の問題であって、必ずしも芸術価値の高下に比例するものではないのである。指導者が芸術価値の問題ばかりを前面に出しすぎると、気どりやではにかみやの日本人は、ていさいや外聞が先に立って芸への入門をしぶりがちになるし、入門後も、自意識や競争意識が邪魔して中途で挫折する者も多い。大衆芸術の指導者たちは、短兵急に芸の深さや高さを大衆に求めないで、芸への楽しみ――生活を文化的に豊かにする営み――の意義と必要性を忘れてはなるまい。大衆芸術も山と同じで、その裾野が広がればおのずから頂きも高くなるものである。

大分の地域文化と生活芸術

昭和20年・30年代の

職場美術

労美展発足のころ

此松法純
県労政課長・県労政協会事務局長

大分県勤労者創作美術展＝「県労美展」も来年度で創設以来20回展を迎えることになる。

この労美展を創設した当時、先ず回顧されることは、初めてやろうとするこの美術展が、今後順調に続けられるとしても、３年も催すことができれば、まず成功であろうと思っていたのに、20回展を開くことができるとは、本当に幸いであると同時に、もう「労美展」もこの大分県にしっかり定着したと感じざるを得ない。この労美展を始めようとした昭和31年頃、戦後の疲れもようやくいえ、県経済も整備から発展へ進もうとしていた時代である。また産業勤労社会も、戦後のさまざまな混迷を通り抜けて、新たな質的向上を求められている中で、勤労者自身がその文化・教養の涵養に目覚め始めた時機ではなかったかと思う。

当時、県内のこうした文化・教養・芸術の催しといえば現在の県美展が、年１回の美術展を開催する唯一のものであった。一方職場や、町の働く人達の中で、それぞれサークル活動も盛んになり、絵画・写真・書道・手芸等の展示会を、また農村グループの中でも、趣味・娯楽を共にする人達が催しをもつ動きが盛り上がりつつあった。だがこうした人びとにとって、県美展はまさに高嶺の花で、中なか自分達の作品を展示してもらえなかったのである。そこで、そのころ活発に創作活動をしていた絵画グループ「新世紀群」等に見ならい、種じゅ討議の結果、県内の勤労者が本当に気軽く、しかし真摯な作品を展示できる機会が提供できるならばとこの「勤労者創作美術展」を計画したのである。早速県内の各職場のサークル、町や村の創作活動をやっているグループを捜して、それにいちいち出かけて、趣旨を説明し参加を求めた。

こうして作品を集めてみると、実に多くの方がたの賛同があり、またその道の先生方からは熱心な指導をいただいて、第１回展は実に、絵画 400点、写真、書道それぞれ 200点余りが出品され、そのため当時の古い商工会議所の１・２階の会議室を借りきって展示することにした。展示会場としてはもち論、それ用にできていないので、パネルもなく、パネル用の木材、バックの布地、針金、釘、ペンチ、ハンマーまで買いこんで知り合いの大工さんに手伝ってもらって会場を作ったものである。展示パネルを組み立て会場ができ上がったときは、夜が明けていたというような第１回展であった。そして出品された作品は、まさにバラエティーのある、すばらしい展覧会で、当時としては大きな美術展として高く評価されたと自負している。

この発足が今日の20回展まで持続しえた礎になっており、そしてこの旗挙げが、その後県内の、この種催しの大きな刺激になったと思っている。自来この労美展は年ねんその内容を充実し、多くの愛好者を呼び込むと同時に、次つぎに内外の作家を送り出す門になったのではないだろうか。

この催しは「労美展」の名が示すとおり、その目的はあるが、決してそれを出品者に強制するものではない。要するに出品者のそれぞれの生活の中で、自ら育つ意欲と、創作の結果をこの労美展の場で発表できれば、その目的の大半以上を達したものと思う。

この県労美展が九州各県に多大の影響を及ぼし、次つぎ県ごとに労美展を開いているので、来年度、九州各県の優秀作品を持ち寄って、この大分県で第１回九州労美展を計画しており、さらにこの労美展の開催の意義を高からしめるよう、関係者のご協力を得たいものである。

／著者は県労美展創始者ならびに県庁絵画サークル創始者[redacted]

（第１回展目録の表紙）

第１回大分県勤労者

創作美術展

とき　昭和31年11月21日（水）
～25日（日）

ところ　大分商工会館

趣旨・大分県の産業に従事する勤労者の文化的素養の向上をはかり豊かな情操を培うことを目的として、勤労者に芸術的表現の喜びと機会を与え、真の勤労生活の中から創作された美術を広く展示しようとするものである。

運営委員（順不同）

絵画／武藤完一・溝辺有巣・菅久・岩尾秀樹・木村成敏・写真／大崎聡明・木村昌斗志・猪原英雄・堀内琴月・書道／安部遊雲・三宮鎮雄・平田寿・森神紫陽・首藤務・一般／草場勇・首藤定・清末清文・佐藤太一・土生武則・中沖豊

職場音楽

県職吹奏楽団の場合

中　野　幸　和
西部吹奏楽連県支部事務局長・県職吹奏楽団楽長

あれは確か昭和37年の春頃だったと思う。当時、41年の「大分国体」を開催するために県庁内に国体事務局が設置され、競技をはじめ、マスゲーム、それに開会式の式典進行を担当する「吹奏楽団」の編成などが、計画され始めていた。そして、ある日国体事務局から電話があった。それは「国体開会式の式典に参加させる吹奏楽団を編成することになったので、このことについて相談したい」とのことであった。

私は、当時県庁職員15人ぐらいで組織された趣味のサークルの音楽部マネージメントと、音楽指導をしていたために、声がかかったものである。早速国体事務局に出かけていろいろと話をした。その結果、県内の中学、高校、職場の吹奏楽チームを集め800人を目標にした「吹奏楽団」を3カ年計画で編成することになった。

私たちのチームは、昭和24年（私の県庁入りの前）に、アコディオン、バイオリン、ギター、それに管楽器のクラリネット、サキソホン、トランペット、トロンボーンなどで編成した、いわゆる「軽音楽団」で、職員の福利厚生のチームであった。

国体事務局で、「この際、県を挙げての大事業であるから、県庁音楽部のチームも参加したらどうか」との話になった。

当時としては、県内には「大分国体を成功させよう」のキャッチフレーズのもとに徐じょに盛り上がっていたし、他のサークル世話役2～3人の人びとといろいろ相談の結果「それでは、わがチームもこの際、編成を大きくして吹奏楽団に衣がえしよう」と決意した。

まず、楽器の補充については、県内30団体のそれぞれ現有楽器を調査し、各チームを33人編成を基準に、不足楽器を購入して整備するとの、県全体の計画の中で、私たちのチームも、国体事務局から楽器補充をしてもらうことになった。そして高音部のピッコロから、低音部のスーザホンまでの33人編成を整えることになった。そして、大分国体参加のための3カ年練習計画をたて、吹奏楽団活動が開始された。しかし何分にも勤務時間外の練習で作り上げるチームであるため、苦労の連続であったが、41年の大分国体には34名が全員参加し、その責を一応果たすことができた

以上が、私たち「大分県庁職員吹奏楽団」結成当時の状況である。

その後、県芸術祭の主催行事、県民吹奏楽にも、一部のメンバーが参加し、近い行事では、本年6月1日のフェスピック開会式にも参加、また、全日本の吹奏楽組織（県―九州・沖縄―全日本）にも加盟して、練習を続け、本年10月には、九州・沖縄を代表して、全日本吹奏楽コンクールにも参加した。

今後も、生活の中に根をおろした安定音楽チームとして進んでいきたいと考えている。

（[redacted]

華　道

未知の世界に向う意欲

瓜　生　　超
小原流大分支部名誉幹部・威徳寺住職

大分の華道界にとっては、昭和30年を境として、大げさにいえば、いけ花ルネッサンスともいえる時代を迎えた観がある。

戦時中は非国民とさえいわれたいけ花も、終戦を契機に東京の勅使河原蒼風、大阪の小原豊雲により、いち早くオブゼいけばなが発表され、戦後のいけ花史の1ページを飾ったわけだが、アバンギャルド的な新しいジャンルとしてのいけ花は、床の間を離れて、従来の生花師匠の観念を越えた独自の作品としてのいけ花となり、各地のデパート、会館にその発表の場を求めて、花ばなしくいけ花展が催されることとなった。この異質な素材を求め構成するいけ花は各流によって異なっていたが、各報道関係は競ってこれをとりあげた。

小生の記憶している範囲では、大分では昭和26年頃から各流共に支部主催の花展を定期的に持っていた様であるが29年の臼杵市各流合同の〃香風会〃の花展は、各流が集まりユニークである。その他社中展では小原流大津光映社中展、草月会の木村静川の社中展も記憶に残っている。

昭和30年にはますます大分の花展は花ばなしくなり、戦前より県下全域に会員を持つ池坊は、例年の県大会と共に同年4月全九州地方展でその偉容を誇った。出瓶数2,300点、会場はトキハデパート、県体育館、碩田中学、中島小学校と大大的で特筆すべきものである。各流の社中展も開かれ、大在の悟自然流池田真空主催の正月花展を皮切りに大分市専正池坊〃みやび会〃津崎一石主催がトキハで開かれ、3月には同じくトキハデパートで〃花と絵の4人展〃が絵画といけばなの対決を試みている。絵は岩尾秀樹氏と広瀬通秀氏、花は小原流瓜生超、草月会寺司美泉で若手作家として、そのテーマ性あるいけ花で市民の注目を集めたことである。

11月には第1回小原流〃新紀会〃花展、瓜生超主催が丸三2階ホールで開かれ、〃いけ花と生活の場〃がテーマであった。作品にもテーマがつけられるようになった。

昭和31年にはいけ花ブームに乗って合同新聞に正月花の特集として各流の代表作が誌上をにぎわしたし、その後、年に一度づつ各流の連合花展が開かれ、個人展は、草月会の草分けである木村静川の〃静鳳会〃が別府、大分、鶴崎で好ましい花展を開き、同じく個人展で寺司美泉、瓜生超が定期的にトキハデパートで、また大分合同新聞の家庭欄のいけ花も担当した。その後、30年代は、池坊、佐藤武彦。小原流国風会、三浦光鶴。専正池坊、津崎一石。草月会、木村静川。悟自然流、池田真空。本能寺末生流、小林栄甫の諸氏により流を盛り上げて居られる。

今、古い記憶をたどりながら、この時代ほど未知の世界に向うおどろきと、意欲に満ちあふれた時代はなかったのではないかと思っている。定形化されつつあるいけ花界にとって、まことに懐しい時代であったといえる。

／記憶をたどっての記述ですので誤りの点はご容赦願います。

（[redacted]

書　道

平田先生と塾

山　口　九　碩
県美協名誉会員・豊池会代表

大分市の高台太平町（大道５丁目）に平田暘邨先生の書屋がある。その奥座敷に、昭和の書聖・北田井天来先生の筆になる「延齢」（えんれい）の扁額がかかげられている。この書は、天来先生が昭和の初め来分された際に、暘邨先生の為に書かれたもので、この意味は読んで字の如く（よはひを長く延ばす）という意のことである。平田暘邨先生は昨年６月８日この延齢額の如く、84歳の高齢で逝去された。先生は明治44年大分県師範学校を卒業され、各地の小学校に奉職、昭和４年文験習字科に合格され書の道への第一歩を踏み出された。しかし本官教職は15年程度で退かれ、以後は中等学校、新制高等学校の講師として勤められる一方、昭和５年には生活に密着した書道（習字）をとの意味で、「豊池書道会」を創設、自ら主宰者として、45年間ひたすら後輩の指導や、県下書道の振興のため尽されたのである。豊池会創設30周年記念書道展を昭和35年夏、大分市トキハデパート大ホールで開催した。

昭和26年大分市の文化功労者（教育）として、また昭和38年には大分合同新聞文化賞（芸術）を受賞した。昭和39年から49年６月までの10年間引き続き同誌の夕刊「灯欄」に寄稿され永年にわたる書道生活の中で得られた、書の心見方、学び方、味わい方、それに自らをきびしく反省しながら、現在の書、これからの書人にかける夢を書きとめられた随想で、読者を「なるほど、なるほど」と感嘆させたのであった。

その内容を全部ここに記すことはスペースがないが、「灯」に投稿してないことで書人の心すべき、言葉の一例を記してみる。

『一事を成就せよ』ということである。一家の書を手本として選び、側目（そくもく）もふらず習うべきである。寸暇さえあれば習うことを忘れてはならぬ。あれもこれもと心を動かしてならぬ。千字文にも「心動けば神疲れ真を守れば志満つ。」とある。一つのものに心を集注すれば、その力は何物をも貫くことができよう。例えば凸レンズで太陽の光線を一か所に集めれば焼くことができるのと同様である。ジックリと腰を落ちつけて、一点一画から徹底的に習うべきである。

世の中が世智辛くなると、とかく先を急ぎ過ぎる。二歩を一歩で進もうとする。十枚の練習を一枚で片づけて、人より先に進んでみたところで振り返ってみると何物も身についてないというようでは、決して習ったとはいわれない。実力以上の地位を望み、分に過ぎた勢利（勢力と利益）を獲得しようと奔走する人が近年多くなった。これも時代の一面を物語るものである。ほんとうに書を生命とする人ならば、そんな事に心を労費することなく、一つの目的に向ってばく進すべきである。

「暇がなくて手習いができない」という人がある。そういう人に限って遊ぶ暇は相当にあるものだ。仮に暇を与えたところで「暇があってかえって勉強ができない。」というに違いない。いったん学書に志を立てた以上は、どんなに忙しくても、着ちゃくと一方から片づけて行く熱心と、機敏と、勇気がなくてはならぬ。」

という意味のことを聞かされたものである。

暘邨先生死去後の豊池会は、ご遺族の方がたと、会幹部とあい計り合議により会を存続させて行くことにしている。

日　舞

合同名流会が気運になって

花　柳　有句秀
県芸振会議理事・県日舞連理事長

大分県日本舞踊連盟の母体は、昭和28年に結成発足した大分市日本舞踊協会である。

戦後、文化運動の台頭はめざましいものがあったが日本舞踊もまた活況をとり戻し大分市内にも多数の稽古（けいこ）場が開設された。

しかし反面、混乱をまぬがれなかった。

そこで日本舞踊をして、すっきりした姿勢で発展への道を進むべきだという声が識者の間に起こり、大分市在住師匠と市内に稽古場を持つ師匠があいより大分市日本舞踊協会を結成するに至った。

当時会員は15名。初代会長に藤間小伊松師が就任した。

以来協会１本で春秋の祭りをはじめ、市文化祭・ＮＨＫ歳末助け合い運動などに協賛出演してきた。

また昭和35年には大分合同名流会が発足したため会員の出演があり協会発展の気運が盛り上がった。

現在の県日本舞踊連盟はこのようなふん囲気の中で、市協会を解消発展させて同年会員28名で新発足したものである。

青年演劇

あの当時と今

菅　沢　活　水
劇団「みずぐるま」

劇団「みずぐるま」が豊後の片田舎に誕生して４年目を迎えた。当時貴紙に寄稿した文を読みかえし、感一しおのものがある。

オリジナルを、それも自分たちの郷土を、からだを通して追体験しよう。そこから、自分の郷土をもう一度見つめてみよう。驚きや疑いの生活は、そこから出発する。このような意気ごみで、初めは既成作品で基礎勉強を、そして

2年目に百姓一揆を背景に水を求める農民の生きざまをテーマにした「ごでえしん左近」が生まれた。この作品に方言が多用されていることを過日のＮＨＮテレビ対談でも質問されたが、別に奇をてらったわけではない。もの書きなら誰でもそうであろうが、千番に一番の、そこだけに生きることばをさがす、それが方言でしか言えないとすればやむをえないではないか。なぜなら、わたしのえがくのは、わたしの村のことなのだから。

これが県代表に選ばれ、全国大会で優秀賞および創作脚本賞を受けた。これで終わってはならない。結団の趣旨を初心を忘れてはならない。と互いに励まし合って本年の「うず舞」が上演されたわけである。これもまた郷土の原尻の滝にまつわる物語である。１年に１作。それでいい。息の長いサークル活動でありたい。そして今、来年のために週２回の練習を重ねている。

そもそも、本県の演劇は長い伝統と輝かしい実績をもっている。戦後の村芝居はおくとしても、昭和24、５年から30年にかけて、職場や青年の演劇活動は今考えても、すざまじく、かつはなやかなものがあった。以後どうして衰退の一途をたどったか、心しなければならないと思う。

そして今、第二の黄金期を迎えようとしている。過日、青年活動家講習に招かれ、湯布院の青年の家で県下の演劇青年たちに接し、たくさんの仲間がいることに意を強ようしたものである。みんな手を握ろう、肩を組もうということで、連絡協議会をつくったが、その手はじめが、緒方、津久見の交換公演である。同じかまのめしを食い、夜おそくまでミーティングする若者の熱気に、わたしは終始、圧倒されたものである。この輪を更に拡げよう、と両地区の青年たちは張りきっている。

県中央に県民演劇「宇佐邪馬台国女王卑弥呼」の成功をみて、わたしたちは心づよく思い、これからも更に、勉強していきたいと思う。県下の演劇活動が一層の盛りあがりをみせることを期待してやまない。

[redacted]

地域文化活動と社会教育

――演劇を中心にして――

尾登一信
県立蒲江高校長

官制の、翼賛文化による戦争いちずな状態から突然に解放された時、呆然として自分を失ったのは、ほんのわずかな期間だけであった。

たしかに就職の道は閉ざされ、食糧不足にあえいでいた時代ではあったが、町にも村にも、復員者、引揚者、疎開者があふれていた。それだけに戦争中にはなかった異常な活発さがあったと思う。最近うんぬんされている過疎現象と思い比べて、今昔の感にたえない。

戦闘帽をかぶり、更生した服を着ながら文学を語り、すりきれたレコードを聞き、手弁当で吟行会に参加した。その話題の一つ一つが、今から考えてみると大変高度のものであったと思う。しかし、そうした活動の大部分は、地についたものにならなかったようだ。それは、24、５年頃から、わずかながら安定のきざしの見えてきた経済・社会とともに、疎開者、復員者等もそれぞれの道について、大分県を後にしたからである。

戦後の地方文化は大きく二つに分けられる。その一つは、前述のいわゆる移入文化であり、もう一つは、地域青年団に代表される土着の文化であった。前述の系統をひくものとして、サークル演劇、その代表として「つみき座」がある。県庁ざぼんグループを水源として、演劇においてはわれと思わん者が集まり、「夜の来訪者」をもって堂々と旗挙げ公演をしたのであるが、その後幾多の変遷があった。一時サークル員の総入れ替え的な改革を行ったこともある。思想的にも苦難の曲がり角に出合いつつ、今年の県民演劇にまで発展したのは特筆すべきことだと思う。しかも今年の県民演劇に「つみき座」創設当時のメンバーが参画していることに注目したい。

前述のもう一つの流れは「高校演劇」である。高校演劇は指導者、特に教師の存在を見逃すことはできない。そして、生徒は３年間で交替する。伝統というよりも、その時点での教師・生徒の努力がものをいうことが多い。高校の性格と合わせて、社会教育、地域文化になり得ない理由である。

それに比べて、地域青年活動から生まれた文化、特に演劇は、一見散発的なようであるが、確実に地に着いたものとして続いてきている。もちろん、指導者も必要だし、指導者のいるところ、全国青年大会に入賞したこともたびたびであり大分県青年演劇の名声を高めてきてはいるが、中でも、犬飼町の演劇サークル「あすなろ」は、地域に根づいた文化活動として注目してよいであろう。彼等は地域青年団活動の中で演劇にとりくみ、演劇をとおして自分たちを見、地域を見、社会を見てきた。そして演劇の輪を犬飼町全体の文化にひろげ、今年の県民演劇祭にも、地味な役柄ながらグループとして一翼を支えている。

芸術祭が企画され、芸振会議が発足し、各ジャンルにすばらしい発展と創造がみられる今日であるが、何か、どこかにひっかかりを感じるのはなぜであろうか。地域に住むひとりひとりが、自分の生活をみつめる中で、創りあげていく。じれったくても、血の通ったものがほしいと思うのは、私だけであろうか。

／著者は当時の県社教主事

[redacted]

臼杵市

市民の支援にこたえて

高橋　正
臼杵文化連事務局長

臼杵音頭の振り出しに「臼杵や昔から商売所……」と歌われていますが、商売と併行して藩政時代から文化面でもよそに引けをとらぬほど花を咲かせてきました。江戸浮世絵界の中心的存在の歌川歌春、南画の高橋草坪を皮切りに、現代まで画家、作家の輩出多く、「臼杵や文化の花咲くところ～」ともいえる歴史的背景をたどってきたわけです。

さて、わが臼杵文化連盟は昭和35年に市民合唱団、人形劇（しいのみ会）、フォークダンスクラブ、美術協会、写真連盟と五部でささやかにスタートしましたが、当時の事務局長・久米氏（現二豊味噌工場長）は次のように回想しています。『そうですね、あのころの市民合唱団はメンバーが30人でした。私が中心になって毎週２回は必ず練習日にあてて磨きをかけ、年１回中央公民館ホールで発表会を開きました。今と違ってまだ市民も音楽に恵まれぬ時代でしたから聴衆は満員の盛況で、町の話題をさらったものでしたよ』。

音楽が大人のものであれば人形劇は子供の人気のまと。１年１回秋のフェスティバルでは小学生対象の大会が花ばなしく催され、田植えシーズンには市周辺部の季節保育所めぐりで園児の喝采を浴びました。こうした中で部員の小道具つくりから公演までの協力には全く頭の下がる思いでした。また、若人の情熱の発散と社交ではフォークダンスクラブの活動が一番注目されました。毎週中央公民館での練習会ではホール一ぱいに整然とリズミカルに踊る青年男女の姿……、ダンスの基礎の充実と叫ぶ金子氏の指導のもとで熱気あふれる会場でした。

一方では、恒例の県美術展秋季展を巡回展として招き、美術の啓蒙を計ろうとする活動を市美協が中心となり開催してきました。これは年中行事の最後を飾るものとして中央公民館一ぱいに陳列、大は120号の大作から小は15号の小品まで、まさに地方美術館の如き盛観でした。35年当時は市内の小中学生は学校で団体引率見学がたてまえで、初めて眼前にみる圧倒されるような抽象作品の大作に奇声を発する小学生も多く、ほほえましいあのころでした。そして写真連盟では美術協会と共催で展示したこともあり、当時は現在の様なカラー作品はないものの、写真愛好層の拡大に大きな役割を果たしたものでした。

ところで、昭和50年10月現在のわが連盟はすでに15年を迎え、加入団体実に22、文字どおり文化の花咲き誇るところまできたようです。ここまできたことは、市民多数の方のご支援の賜と深く感謝しています。また一方発足当時から活躍されている細野理事長のおやじ的存在、まとめ役があったからだとつくづく感じています。和気あいあいの前途洋ようたる団体だとちょっぴり自負しているところです。

[redacted]

竹田市

文人画の保存活動

帆足　脩
竹田商工会議所青年部会事務局長

竹田市は、各種史跡や文化財の高い地区である。

地理的に九州の中央に位置し、交通の要衝の地にあるためか、あるいは豊富な清流に恵まれた景勝の地であるためか、古代石器時代から現代にいたるまで、各時代の特徴をもった文化遺産が数多く残されている。

竹田商工会議所青年部会では、歴代の観光開発委員会により、各種史跡、文化財の調査活動を行っているが、残念ながら専門的な調査は不可能に近く、また体系的に記録してゆく能力も乏しい。

しかしながら、われわれの乏しい力でも、まず手がけられるものから、一歩づつ開拓していかなければ徒労に終わってしまうものであり、その手がけたものの一つが文人書画展の開催と、その記録集の出版である。

われわれの調査活動のなかで学びえたものは、岡藩時代の竹田が、山間僻地にありながら、予想以上の経済力と、高度の文化水準を持っていたこと、および現在の大量の文化財流出である。

広瀬淡窓が、かつての竹田をうたった七言絶句がある。

千巌萬壁入岡藩　士庶肩摩街路喧
絶壁雲懸公子館　断崖泉落大夫門

（広瀬淡窓南遊雑詩10首之１）

風光に恵まれた岡藩の繁栄のなかで、独自の文化が生まれ、その最たるものが田能村竹田先生を頂点とした、学者文人画家の活躍である。

さて、郷土の学者の足跡や文人画家の業績については、古書をひもどいて業績を調べ、作品を持ち寄って鑑賞することはできる。しかしながら、作品の価値判断は不可能に近く、書物以外から先人の業績を求めることも非常な難事である。

暗中模索のわれわれにとって、幸なことには、竹田市には竹田先生が創始した豊後文人画の継承者で竹田市名誉市民草刈樵谷先生が、84歳にして今なお矍鑠として活躍されており、先生の適切なご指導をうけることができたことである。

昨年８月、樵谷先生のご指導により、第１回文人書画展を開催したところ、予期以上の大きな反響があり、これに意を強くして本年11月開催した、第２回文人書画展にあたっては、記録を内部に止めず、編集して出版することとした。

記録集編集については、いうまでもなく草刈先生の全面的なご指導をうけた。まったく的はずれの質問にもこころよく解説していただき、序文解説、表紙の揮毫など、まさにいたれりつくせりのお世話をいただいた。

われわれの調査は、いまだ不充分であり、記録方法、展示方法も未熟であるが、今後も引き続き文人書画展を開催していくことを計画している。

われわれの事業により、先人達の業績が再認識され、遺作の流出防止に役立つことができることをねがっている。

（〒878　竹田市上町　竹田商工会議所）

県社会教育委員一覧（S 49. 12. 10 / S 51. 12. 9）

葱花　勲 県高等学校長代表（佐伯鶴城高校長）	大谷　弼 日田市社会教育委員
藤野　新 県中学校長代表（滝尾中学校長）	後藤　文夫 大分大学教育学部長
三浦　貴 県小学校長会会長（鶴崎小学校長）	佐久間　盛夫 竹田市長
麻植　敏秀 県高等学校ＰＴＡ連合会会長（県議会議員）	佐藤　文生 県図書館協議会委員（衆議院議員）
荒巻　聡子 県子ども会育成会連絡協議会長	中山　宏男 市町村教育委員会連合会会長
岩男　頴一 県公民館連合会会長（参議院議員）	長野　シズ 県ユネスコ協会連盟常任理事
椎原　ムツヨ 県地域婦人団体連合会会長	野尻　哲 「小さな親切」運動大分県本部長（県議会議員）
菅田　敏幸 県連合青年団団長	正本　秀雄 武蔵町長
土井　武志 県ＰＴＡ連合会会長	山本　泰教 別府女子短期大学教授
稲浦　龍一 中津市教育長	麻生島　茂 大分県町村会会長（院内町長）

県社会教育指導員（各教育事務所・所属）

（中津地方）　欠員
（別府地方）　緒方計真　速見郡山香町[redacted]
（大分地方）　田原堯史　大分市新川町[redacted]
（佐伯地方）　塩月佐一　佐伯市上久部
（竹田地方）　三浦　真　大野郡三重町[redacted]
（日田地方）　黒木静雄　日田市丸の内町[redacted]

市、町、村には委嘱の社会教育指導員あり。

豆知識

・社会教育委員

教育委員会の社会教育に関する助言機関で、社会教育法にもとづいて地方自治体に任意設置される。教育委員会が地方自治体の区域内にある各学校の長、各社会教育関係団体の代表者、学識経験者のなかから委嘱する。その職務は社会教育計画の立案と教育委員会の諮問にたいする意見具申およびそれらに必要な研究調査などであるが、市町村社会教育委員会の場合は、教育委員会から委嘱された青少年教育に関する特定事項について、社会教育関係団体、社会教育指導者などに助言と指導をあたえることができる。

・公民館

社会教育法にもとづき、市町村が設置する社会教育施設地域住民のために、実際生活に即した教育・学術・文化に関する各種事業を実施し、住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化をはかり、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的にする。昭和21年7月に文部省によってはじめてその設置が提唱された。

・社会学級・婦人学級

内容は、一般教養、職業、家庭生活の各方面にわたっており、1回ごとに主題を変えていくものが多い。聴講者には婦人が多く、政府の婦人教育振興策に伴って婦人学級が各地で盛行し、ＮＨＫのラジオ・テレビ集団視聴による婦人学級にかなりの普及をみせている。婦人学級の内容もコースを分けて計画的となり、共同学習方式をとりいれている。

・成人学校

主として市（区）の教育委員会が小・中・高等学校の施設を利用して一般住民のために開設する講座で、普通、年2―4期、1期2―3カ月、1科目週2日、1回2時間で、1科目あたり20―30時間。1期に5―15科目を併列開講して、それぞれ受講希望者に随意に選ばせる。

外科・呼吸器科・気管食道科・麻酔科
安永病院
院長 安永敏教
大分市大道4丁目（大分バス志手入口下車西入る）
☎44―0359（代表）

芸術とは……　文化とは……

解説

芸術文化振興会議の芸術とか文化とは何か、われわれは日頃からばく然と芸術や文化を口にしているが時にはあらためて考えてみることも必要であろうと思う。

少しむずかしくなるが高橋義孝、日高六郎両先生のことばをここに引用してみた。

芸　術

もと中国のことばで「芸」はわざ・才能・才知・学問・技術の意味であり、「芸術」はわざ・学問と技術、とくに卜祝筮匠（ぼくしゅくぜいしょう）の技の意味だが、今日では美を創造表現する人間の精神的・身体的活動の総称で、日本では明治以降もっぱらこの第二の意味で用いられている。もっとも明治時代には「美術」という語が今日の「芸術」という語の意味で用いられたこともある。ヨーロッパでも、ラテン語のアルスarsには芸術と技術の両義があり、今日、「芸術」を意味するart（イギリス・フランス）、Kunst（ドイツ）はこのラテン語のアルスからでた。現在日本では漢字の新字体「芸」を用いるが、これは正字「藝」から「執」を抜いたもの。

〔芸術の本質〕芸術は美を創造する人間の一活動とはいうが、それなら美とはなにかというきわめて複雑困難な問題がでてくる。これは美学という学問の根本問題であるが、ここでは一応、美とは人間に精神的・心理的快感を覚えさせるものと定義しておく。美には、自然の風景にそなわっているような自然美と、すぐれた絵や小説などがもっているような芸術美とがある。芸術美が成りたつための条件として、(1)人間の意識的行為、(2)その行為になんらかの実用的目的があったとしても、それが最小限度のものでなければならないこと（これを芸術の無目的性あるいは自己目的性ということもある）、(3)その活動が広い意味での物的・物理的なものを媒介としてなされること、(4)その物的・物理的な媒介物（美の表現手段）が表現しているものが観念的であること（これを美の仮象性とよぶこともある）、その他が考えられる。芸術とはなにかに関する考え方には、大別して(1)芸術においては「なにが」（描かれるもの）ではなく「いかに」（描き方）が問題であり、精神的・心理的快感を覚えさせることに芸術の本質があるとする心理主義的・形式主義的な考え方と、(2)「いかに」でなく「なにが」か問題であって、芸術は人間の世界観・人生観を感性的形象（たとえば色・形・音など）によって表現するとみる哲学的・内容主義的考え方とがあり、今日では後者の考え方が優勢である。

〔芸術の種類〕絵画・彫刻・建築・陶器・映画などは物的芸術、演劇・舞踊などは人体芸術、詩・小説・戯曲などのいわゆる文学は観念（言語）芸術である。文学においては論理的内容が最大で、情緒的内容が最小であり、音楽においてはこの関係がぎゃくになる。しかし、あらゆる芸術は理知によってでなしに感情によってつくられ味わわれる。

（高橋義孝）

文　化

文化ということばを定義することは簡単ではない。西ヨーロッパ語では、「土地をたがやす」というラテン語が語源で、人間の手が加わっていない自然と対置される。これがもっとも広い意味での文化である。さらに進んで、人間の精神や能力や技術が、教育や訓練で洗練された状態をさす。また、人間がつくりだした洗練された有形無形のものをさす。これが文化の一般的な意味である。

学問的には、文化とは次のように広狭二つの意味に使われる。広い意味ではイギリスの人類学者タイラーの定義がある。すなわち文化とは、「知識・信仰・技芸・道徳・法律およびその他の能力や習慣を含む、ある社会の一員としての人間によって獲得された複合体」である。また、文化とは、世代から世代へ受けつがれていく社会的遺産のすべてである、というものもある。すなわち、人間が後天的に学び、習得し、さらに手を加え、次の世代に伝達されていくもののいっさいをさす。このように考えて、未開社会であろうと、文明社会であろうと、あらゆる社会がもっている文化を普遍文化とよんで、その目録をつくる試みもある。たとえば、アメリカの人類学者ウイスラーは、言語・物質文化・芸術・神話および科学的知識・宗教・家族と社会組織・所有と財産・統治のしかた・戦争の方法を普遍的文化としてあげている。

これに対し、主としてドイツ系の学者のなかには、文化を狭く定義しようとするものがある。すなわち、かれらは自然に適応する技術に代表される「文明」や、人間関係を規制する政治・法律・道徳などを含む「社会」などとちがった、ある理念をめざして創造される芸術や思想や宗教などのような精神活動を「文化」と考えている。たとえばドイツの哲学者ディルタイによれば、文化は究極的には個人の人間性からあふれでる自由な目的と行動によってささえられ、国家や民族や家族などの外的な社会組織から区別される。また、ドイツの社会学者ジンメルによれば、文化は「より多くの生」でなくて、「生より以上のもの」としての客観的・精神的形象であり、生の流動をおしとどめ、結晶化したものである。ドイツの社会学者シェーラーは、文化とは理念的な目標をめざす精神によって生みだされた所産であるとしている。今日では文化は前者のように、広義の意味で使われることが多い。

とくに近代的な国民国家が成立して以来、文化の国民的統一が強まっている。イギリス文化、ドイツ文化、フランス文化、アメリカ文化、日本文化などはその一例である。もちろん文化は、世代から世代へ伝承されると同時に、地域から地域へ伝播（でんぱ）されるものである。とくに日本のように外来文化の受容がさかんなところでは、中国などを中心とした大陸文化や、明治以後急激に導入された西ヨーロッパ文化が重層し共存して、独自の混合文化を形成している場合もある。

ある民族（あるいは国民）のなかにみられる文化の統一性は、文化類型として研究されている。たとえば、アメリカの文化人類学者ベネディクトは、ヨーロッパ的文化を「罪の文化」、日本の文化を「恥の文化」としてとらえた。つまりかれは道徳が絶対的な基準となって成員の良心を啓発する文化が、ヨーロッパ人の行動様式の典型であると考え、それに対して、他人の思わくと自己の体面とに重点をおく文化が、日本人の行動様式に典型的に示されているとした。このように文化の統一性が強い場合、当然そこに統一的な民族性（国民性）が生まれる。

また、階級社会では、支配階級がその社会の文化の特質を大きく決定する。古代ギリシャ文化が支配階級の文化であったことは指摘するまでもない。しかし、古代ギリシャの芸術作品や思想・哲学にみられるように、支配階級の要求にこたえながら、同時に時代をこえてその価値が受けつがれるような創造も可能である。

（日高六郎）

ニュース

第11回県芸術祭賞決まる

○県芸術祭賞

「箏・三絃・尺八による邦楽演奏会」大分県三曲協会
「宇佐耶馬台国・女王卑弥呼」大分県民演劇制作協議会
「武蔵町産業文化祭」武蔵町ほか4団体

○特別感謝状

中　沢　とおる　「女王卑弥呼」作・演出
遠　藤　梢　山　「邦楽演奏会」7流派15社中の結集
大分県庁職員吹奏楽団
「全日本吹奏楽コンクール全国大会」三位入賞

○感　謝　状

第11回芸術祭共催参加各団体へ
表彰式は12月24日県庁総合庁舎63会議室にて

受　賞

○ウインナーワルド・オペラ賞　特別賞

大分県民オペラ「吉四六昇天」

（日本オペラ界の優れた声楽家とオペラに従事する人々を顕彰することを目的に年間を通じて優れた業績を示した者に与えられる。）

○ふるさと大分顕彰

加藤　正人氏　大分郡挾間町
県内の民謡数百曲を現地採譜するとともに、それらを収録した「ふるさとの歌」を出版。

「下竹田今昔」刊行委員会　直入郡直入町
（工藤久氏、小代一氏、田北大善氏、河村芳雄氏）
明治22年下竹田村発足以来現直入町に至る下竹田地方の教育、文化、民俗などをまとめた「下竹田今昔」を刊行した。

太田　利男氏　杵築市南杵築
元禄15年から明治4年までの記録を収録している「杵築町役場日記」を解読した。これによって杵築地方史を詳しく知ることが出来る。

佐藤　善忠氏　大分市小中島
工業化で大きく変った大野川河口の小中島地区の歴史と記録をとどめる目的で、江戸時代から現在まで、約400年間の「小中島小史」を刊行した。

田北　ユキ氏　大分市上野丘東
亡夫田北学氏の「増補訂正編年大友資料」の編さん事業を引き継ぎ、24巻から55巻と別巻上を刊行。

土屋　北彦氏　杵築市八坂
郷土の民謡や里謡の収集を30年間続け、「大分県の民話」「里謡その歴史と創造」などの著書がある。

昭和50年度九州地区演劇講習会の開催

文化庁・県教委・津久見市・津久見市教委主催、芸振会議後援により、1月31日（土）～2月1日の2日間、津久見市民会館において九州地区演劇講習会が開催されます。

アマチュア演劇活動にたずさわる方（青年団演劇部・青年学級演劇部・職場演劇・自立演劇・学校演劇等の関係者）なら誰でも受講できます。

なお、内容は、演劇の基本、実技指導、研究討議などとなっています。

受講料は不要、申込みは県教育庁文化課へ。

来年の第12回県芸術祭行事案

- 県日本舞踊連盟「春夏秋冬」
- 県民オペラ「魔笛」モーツアルト作曲
- 民謡、民踊「郷土の歌とおどり」
- 県人形劇サークル協議会
- 県民演劇

特別参加行事（大分合同新聞創刊90周年記念行事）

- 大分県諸流派いけ花展
- 田能村竹田とその一門・豊後南画展
- 表千家茶道大会
- 大分合同三曲名流選

表千家大分県支部

昭和50年の行事

秋　吉　方　子
表千家同門会大分県支部長

3月23日	支部総会、別府観光会館にて　出席者600名 家元理事永田宗匠外1名
3月24日	教授者講習会　講師永田宗匠
4月	牧喜久子主催茶会　大分市日岡にて
6月	あやめ会　中津福田アイ主催
9月19日	大分県同門会物故者慰霊祭　大分市万寿寺本院にて　永田宗匠を迎えて
10月13日	資格者講習会　別府豊泉荘にて　出席者250名 家元講師　管田兼三
11月2日	竹田市にて同風会　栗木かつ組 加藤八千代組　主催
11月23日	故辛島淑子先生追悼茶会　宇佐神宮にて 門下和田寿賀保 清瀬いさを　主催

以上の行事をいたしました。

豆知識

- 亭主（ていしゅ）茶会の主催者。元来は喫茶の亭の主人という意。
- 正客（しょうきゃく）茶会に招かれる客のうちで最上位のもの。席入りも、菓子や茶をいただくのもいちばん初めで、総客を代表してあいさつもせねばならない。
- お詰（つめ）①茶会に招かれた客。末客ともいう。亭主の手助けをして、茶器の取り次ぎや待合いその他の後始末をする。老巧な茶人がつとめる。②茶師のこと。濃茶のとき、お茶の御銘は、お詰はと、茶会に招かれた正客が亭主に聞くのを常とするが、その場合、その茶を製し茶壷に詰めた茶師の名を聞くことになる。
- 4規7則　千利休が説いた茶の湯の心のこと。4規とは「和敬清寂」ということであり、7則とは「茶は服のよきように点（た）て、炭は湯のわくように置き、冬は暖かく夏は涼しく、花のように生け、刻限は早めに、降らずとも雨具の用意、相客に心せよ」ということ。すなわち、茶の湯は自然のままであれということを述べている
- 寄付（よりつき）待合ともいう。茶会の際に、客が最初に集まって待ち合わせ、身支度する場所。
- 腰掛待合（こしかけまちあい）外露地にある待合のこと内露地にあるのは内腰掛という。

波紋

公民館の役割

在学青少年の文化を育てる拠点としての

篠原良虎
県教育庁竹田教育事務所 社教主事

昭和四十九年四月社会教育審議会より建議された「在学青少年に対する社会教育の在り方について」の中にあるように、青少年の豊かな人間形成を図るためには、家庭・学校・社会のそれぞれの教育が独自な機能をもちながら調和を保った連携が必要であることは、いま大きな社会的課題となっています。

家庭教育、学校教育と社会教育との連携についての話し合いの場でいつも問題となるのは、社会教育の諸条件が著しく立ちおくれていることです。

県内においても、社会教育機関としての公民館などは、着々と整備されつつあります。

私の管内のM町の公民館は、九州一の規模を誇るマンモス施設ありT村は、人口三千人足らずなのに一億数千万円の公民館を建設中です。

このように施設は順次整備されつつありますが、ほとんどの事業は、青年・婦人・高齢者家庭教育など大人の対象事業で、子ども対象は、図書利用程度のものが多いようです。

在学青少年（子ども）の活用の場としては、やや寂しい感じのするのが実態です。

では、在学青少年の文化を育てる拠点としての公民館の役割はどんなものが考えられるでしょうか。つぎのような程度のものは地域によっては導入できるのではないかと考えられます。

また、県下でもいくつかの公民館がすでに実施しているようですので参考にされたらいかがでしょう。

(1) 手づくり教室（わらぞうりづくり、魚とりサイクリング、竹かごづくり、手打ちうどんづくり、かまどづくり、薪でごはんをたく）などおじいさん、おばあさんを講師としてむしろの上で作業をする。

(2) むかしのおもちゃ講座（水でっぽう、紙でっぽう、竹トンボ、ふえ、ひこう機、たこ、竹馬、お手玉、あやとり、石けり）などの製作と遊び方、テレビかじりつきっ子は、たまには、こんな遊びをさせるのもよいと思います。

(3) 人形劇教室（人形劇のはなし、うた、効果、人形製作、脚本、演技、演出、試演、発表会）など人形劇、演劇、民俗文化財でも同じように、過程を楽しく経験させる。

(4) 子ども劇場（舞台劇、人形劇、バレエ、音楽、寄席、奇術）など色いろなジャンルをとりいれた鑑賞会隣接市町村とタイアップして楽しみ会をする。先日S町で人形劇の会がありましたが、盛会で子どもが生き生きしていたそうです。

(5) また、その他のグループ・サークル活動（コーラス、絵画、昆虫教室、読書、手芸、文化財めぐり、ケーキづくり、お人形づくり、器楽合奏）。趣味グループ・サークルは、最初は手をとりますが、順次自主サークルに育てていくことがよいと思います。

その他スポーツ面はいろいろあると思いますが、ここでは文化的な活動に限定し、とりあげてみました。まだまだたくさんあると思いますが手づくり教室などは、ほんの小さな芽にすぎないかもしれません。しかし、それを育てることは、大きな茎大きな葉、そして大きな花や実になると思います。

ただ公民館の限られた職員だけではどうにもなりません。PTA、婦人団体、自治会、教職員関係団体など各種団体が青少年を育成する地域運動としての組織づくりが必要で、ある面ではボランティア活動としての指導者の協力を望まねばならない面があると思います。公民館などの社会教育施設、職員体制を早急に条件整備せねば、いまの子どもはかわいそうだと思います。充実までの移行段階として、少しでも場を与えてやりたいものです。

[redacted]

紹介

史跡と仏跡の里
国東町歴史民俗資料館

設置の趣旨

国東町には、縄文時代の成仏岩陰遺跡、弥生時代の低湿地集落として静岡県の登呂遺跡に比較される安国寺遺跡があり、ここから出土した多くの土器・石器・骨角器・農耕用具などがあります。

また、六郷満山文化と呼ばれる国東半島独特の仏教文化や庶民の素朴な信仰につながる石造物や民俗資料もたくさん残されています。

これらの文化財や資料の散逸、破壊、紛失を防ぎ、郷土の文化遺産としてたいせつに保存展示し、地域住民の学習に役立たせるとともに、文化財の保護・愛護活動の拠点としての役割りを果すべく、県下市町村にさきがけて建設されたものです。

展示の概要

国東町歴史民俗資料館は、「くにさきの信仰と庶民のくらし」をテーマに、この地方の考古、歴史、民俗資料を調査して収集、分類整理のうえ公開展示しています。

考古資料は成仏岩陰、ワラミノ、安国寺、重藤早馬ケ丘砂丘4遺跡の出土品を中心に常設展示コーナーを設けてあります。

歴史・民俗資料は、「史跡と仏跡の里くにさき」の歴史や先人のくらしの移り変わりを目で追えるように、随時テーマを掲げて的をしぼりながら、テーマにふさわしい展示内容とするため、期間を定めて更新していく予定です。

建設年月日	昭和49年3月30日
構造	鉄筋コンクリート造り2階建、屋根アスファルトシングル葺寄せ棟
規模	敷地面積 1,090㎡　建築面積 488㎡ 床面積　1階 338㎡　2階 280㎡　延 618㎡
建設費	70,000千円（うち国補助 2,000千円、県補助 2,000千円、起債34,000千円）
開館年月日	昭和49年11月15日
所在地	大分県東国東郡国東町大字鶴川 150－1 〒 873－05　TEL（09787）②2677番